

茶わんのウラ

重病の夫人を傍らかたわに先輩の話は自由闊達かつたつ。「財布を忘れてバスで立ち往生した時、後ろの中年の女性がつと僕の前に出て、お父さんの分も、と言って支払い降りて行った。お礼を言ういとまもなかったよ。悪徳政治家が日本を汚し、こんな人たちが清めているんだね」

先輩は大学定年後、私大講師を五つほどしていたが、六年前から夫人が入退院をくりかえす状態で、看護学校一つ残して家事専念。だからすべてが学習。老いにこそ日々ざりざりの学習がある。生涯学習とはそのことを指す。

「僕が洗った茶わんを見て、妻がウラがよごれていると言う。僕はウラでは食わんとやり返す。病人とケンカしても、と知りながら、つい出てしまう。人間関係の中で夫婦が一番近く、一番ヤヤこしいね」。奥さんもめそめそはしていない。先輩はその師下村湖人の詩を引用して、

「ならんで歩くがいい／手をとって歩くがいい／だが、足だけはもつれないよ

うに／ただ歩調だけをあわせて／めいめいの力で／めいめいの地面をふむがいい／たといどんなに親しい仲であろうとも／また、恋人どうしの仲であろうとも”

「さすが湖人も最後に、夫婦の仲であろうとも、とはつけ加えてないね。年とると一番平和がほしい。しかし、人間相手ではむずかしい。茶わんのウラはよごれても、寄りそうて老後なんて、ゼイタクな話だよ」。先輩の名は永杉喜輔きすけ。群馬大名誉教授。

(一九九四年一月十二日)